# 看護学生のコミュニケーション行動に関する研究

Development of Communication Skill Scale of Nursing Students

廣瀬春次*、太田友子*、井上真奈美*、中村仁志*
Haruji Hirose*, Tomoko Ota*, Manami Inoue*, Hitoshi Nakamura*
*Depart of Nursing, Faculty of Nursing and Human Nutrition, Yamaguchi　Prefectural University

要約

本研究の目的は、１）看護教員が看護学生のコミュニケーション能力として求める行動レベルでの質問項目により、看護学生の基本的コミュニケーション尺度を作成すること、及び２）看護学生のコミュニケーション・スキルが対人ストレスや職業同一化にどのような影響を与えるかを明らかにすることであった。155名の看護学生を対象に調査を行い、そのデータに基づき因子分析を行った結果、「状況に添った行動」「かかわり行動」「集団への参加」「人への関心」の4因子が認められた。更に、この尺度とKiSS-18との関連を検討した結果、両尺度のすべての因子間で有意な相関が認められ、妥当性が証明された。研究２では、仮定したように、コミュニケーション・スキルは、対人ストレスの特に対人劣等に影響を持つこと、また、看護職への傾倒や意欲を高めることが示された。

キーワード　コミュニケーション・スキル、社会的スキル、看護学生
Key words：Communication Skill, Social Skill, Nursing Students

## はじめに

厚生労働省（2007）は、今後の看護教育においてコミュニケーション能力の向上や保健医療福祉との連携・協働を通して看護を実践できる能力の育成に留意したカリキュラム編成を求めている。対人援助職としての看護師の育成を行うためには、基礎的な対人関係スキルである学生のコミュニケーション能力を、４年間の学生生活の中で、はぐくみ成長させることを期待されるが、コミュニケーションツール多様化等の社会的背景の中、同世代の若者同様、看護学生の生活力や対人関係スキルの低下が指摘されている。いくつかの研究（橋本、2000；宮田、2004）は、社会的スキルが対人葛藤方略の質に影響を与え、対人関係の問題を生じやすくしていることを示唆している。このことは、看護系学科を持つ大学のみならず、多くの大学で学生の社会的スキル向上の創意工夫が求められるといえよう。

このような、学生のコミュニケーション能力向上を目指す場合、明確な定義に基づき社会的スキルやコミュニケーション･スキルを測定する尺度の開発、学生の社会的スキルの実態に関する基礎研究が不可欠である。従来、社会的スキルとして、菊池ら（1988）がゴールドシュタインら（1989）の行動分類のリストに基づき作成したKiSS-18が多くの研究で用いられてきた。工藤ら（2007）は、看護職を目指す学生がこの種の社会的スキルは高いが、初歩的なスキルが低いこと、野崎ら（2002）は、看護学部１年生の社会的スキルは１年間でほとんど変化がないこと、山本ら（2009）は、グループ学習前後で、質問項目によっては向上の認められるものが少なからずあること等を、KiSS-18を用いることで明らかにしている。

本学看護学科のカリキュラムにおいては、実習が始まるまでに対人援助論やヒューマンケア入門等の科目により、その基本的コミュニケーション・スキルやチーム医療における調整能力の育成に力を入れている。看護学生に求められる特有のコミュニケーション・スキルを測ることができれば、授業構成や内容についての検討をする上でも重要な意味を持つ。即ち、看護教員が日ごろの看護学生に対し、対人コミュニケーションにおいて身につけてほしい基本的行動を質問項目とする尺度を作成し、看護学生のコミュニケーション･スキルの実際を知ることは、看護教育のための基礎資料として不可欠である。更に、このような看護学生のコミュニケーション・スキルは、看護学生の対人ストレスや職業同一化に影

*山口県立大学看護栄養学部看護学科

響を及ぼすことが考えられる。橋本（2000）は、社会的スキルが対人ストレスの対人劣等にのみ影響を及ぼすことを示している。また､白鳥ら（2009）は、大学において学生の成功体験や自信を持つ体験が、専門職社会化に影響を及ぼすことを示唆しているが、学生の実習等での自信等が社会的スキルに影響を受けることを考えるなら、コミュニケーション能力が、職業同一化に影響を与えることが容易に予想される。

## 研　究　1

### 目　的

研究Ｉの目的は以下の通りである。

１）看護教員が看護学生のコミュニケーション能力として求める行動レベルでの質問項目を作成し、それらを因子分析することで、看護学生のコミュニケーション行動を分類する。

２）作成した看護学生の基本的コミュニケーション尺度について、KiSS-18との関連を検討し、妥当性の検証を行う。

### 方　法

１．調査対象

A大学に在籍する２年次・３年次・４年次の学生155名。2008年12月に実施した。

２．調査方法

基本的コミュニケーション尺度：看護教員３名による看護学生に身につけてほしいコミュニケーション･スキルに関する自由記述および文献検討により、看護学生に必要なコミュニケーション・スキルや対人関係を構築する際に必要と考えられるスキルについての50の質問項目を作成した。この質問項目に対し「いつもそうではない」「たいていそうではない」「どちらともいえない」「たいていそうだ」「いつもそうだ」の５段階評価の自記式質問紙（基本的コミュニケーション･スキルに関するアンケート）を用い、調査を実施した。因子分析等にはSPSS11.0を用いた。本尺度では得点が高いほど、コミュニケーション・スキルは高くなる。

KiSS-18：菊池ら（1988）が作成した社会的スキルを測定する尺度。スキルⅠ：初歩的なスキル、スキルⅡ：高度なスキル、スキルⅢ：感情処理のスキル、スキルⅣ：攻撃に代わるスキル、スキルⅤ：ストレスを処理するスキル、スキルⅥ：計画のスキルの6種類のスキルに関して、それぞれ３つの質問項目、計18項目が含まれる尺度。研究参加者は、各質問項目に対し、「いつもそうではない」「たいていそうではない」「どちらともいえない」「たいていそうだ」「いつもそうだ」の５段階で回答する。得点が高いほど、社会的スキルが高いことを意味する。

３．倫理的配慮

調査依頼の説明を聞く意思をもった学生に集団形式にて研究の目的・趣旨について説明を行った。調査への参加は自由意思であり、調査の結果や調査への参加状況は、コミュニケーション関連科目の単位取得あるいは成績には一切関与しないことについて説明を行った。調査票を配布し、同意の得られた者へ協力を依頼した。収集された調査用紙とその入力データは、研究者が管理を行った。

### 結　果

対象ｎ＝155名、有効回答数n=147（有効回答率94.8％）であった。最初は以下のような手続きで項目分析を行った　1. 各項目ついての反応の平均と分布を算出し５段階評定のうち、２以下　あるいは４以上の反応率が90％以上の項目は削除した。 2. 上位下位分析により、有意差の見られなかった1項目を除外した。 3. 因子負荷量　0.35以下の項目は削除した。

以上の分析により、最終的に26項目がコミュニケーション能力を構成する項目として残った。因子分析の結果、最も統合的な解釈が可能であった４因子構造を採用した。因子１は、「適切な語彙を使っていますか」「話の流れに沿って質問をしていますか」等の項目への因子負荷量が高いことから、場面を的確に判断し行動に移すことができ、また、配慮ができる行動を示していると判断し、「状況に合った行動」と命名した。因子２は「相手の表情に合わせて、自分の表情を変えることができますか」「身振り手振りを話の中に効果的に取り入れていますか」などの項目に負荷量が高く、相手の話を傾聴する姿勢と相手に対する自分の意思を示すことができることを含んでいることから「かかわり行動」と命名した。因子３は「必要なときはリーダの役割を果たせますか」「集団の中で自分の役割を認識できますか」などの項目に負荷量が高く、集団の中での自分の役割把握や主張ができることを示していること

から「集団への参加」と命名した。因子４は、「相手の話に集中して聞いていますか」「人の話を聞いていると自信をもっていえますか」等の項目への負荷量が高く、看護師のコミュニケーションとして重

表１　基本的コミュニケーション尺度（26 項目）の探索的因子分析の結果

| | 因子1 | 因子2 | 因子3 | 因子4 |
|---|---|---|---|---|
| 16　適切な語嚢を使っていますか | 0.696 | 0.112 | 0.072 | 0.105 |
| 9　話の流れに沿った質問をしていますか | 0.621 | 0.235 | 0.269 | 0.099 |
| 23　相手にわかりやすい言葉で伝えていますか | 0.615 | 0.206 | 0.172 | 0.168 |
| 20　だれが、いつ、、どこで、何を、なぜ、どのようにしたのかなど、具体的に伝えていますか | 0.559 | 0.127 | 0.208 | 0.198 |
| 8　相手の立場を配慮した発言ができますか | 0.553 | 0.311 | 0.194 | 0.047 |
| 37　他者の許可が必要かどうかの判断を的確にできますか | 0.537 | 0.104 | 0.406 | 0.131 |
| 22　目上の人と話すとき、敬語を適切に使えますか | 0.481 | 0.141 | 0.188 | 0.17 |
| 5　相手に待ってもらう時に、「お待ちください」と言いますか | 0.407 | 0.278 | 0.122 | 0.196 |
| 12　相手の表情に合わせて、自分の表情を変えることができますか | 0.168 | 0.649 | 0.124 | 0.118 |
| 13　身振り手振りを話の中に効果的に取り入れていますか | 0.236 | 0.631 | 0.184 | -0.047 |
| 19　人の話をきくときは適切なタイミングで頷いていますか | 0.249 | 0.623 | 0.22 | 0.17 |
| 11　話をするとき、内容に合わせた声の抑揚をつけていますか | 0.105 | 0.596 | 0.327 | 0.132 |
| 15　「へえー」「そうなんですか」といった心のこもったあいづちをしていますか | 0.265 | 0.574 | 0.156 | 0.018 |
| 17　相手と意見が違っても最後まで話を聞いていますか | 0.147 | 0.507 | 0.014 | 0.221 |
| 24　他の人の意見を尊重できますか | 0.091 | 0.458 | 0.077 | 0.201 |
| 10　自分の思いを表情で相手に伝えることができますか | 0.025 | 0.394 | 0.287 | -0.092 |
| 25　必要なときはリーダの役割を果たせますか | 0.259 | 0.104 | 0.781 | 0.128 |
| 14　集団の中での自分の役割を認識できますか | 0.249 | 0.184 | 0.687 | 0.073 |
| 26　他者と協力して集団の課題にとりくむことができますか | 0.162 | 0.175 | 0.663 | 0.207 |
| 2　集団の中で、自分の主張ができますか | 0.282 | 0.247 | 0.641 | -0.04 |
| 18　相手に聞こえるようなはっきりした声で話していますか | 0.271 | 0.367 | 0.458 | 0.111 |
| 7　集団の中で不安を感じませんか（感じることがありますか） | 0.072 | 0.106 | 0.394 | -0.044 |
| 3　相手の話に集中して聞いていますか | 0.082 | 0.104 | 0.064 | 0.82 |
| 1　人の話を聞いていると自信をもっていえますか | 0.234 | 0.068 | -0.011 | 0.703 |
| 4　自分から進んで挨拶をしますか | 0.124 | 0.206 | 0.298 | 0.366 |
| 6　自分と関係のないことは、耳を傾けないということがありますか | 0.185 | 0.101 | 0.043 | 0.359 |
| 寄与率 | 12.43 | 12.92 | 11.97 | 7.09 |
| 信頼性（α） | 0.837 | 0.819 | 0.817 | 0.67 |

表２　社会的スキルの下位変数とコミュニケーション尺度の各因子との相関係数（Pearson）

| 社会的スキル／コミュニケーション尺度 | スキル1 | スキル2 | スキル3 | スキル4 | スキル5 | スキル6 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 状況に合った行動 | 0.417** | 0.476** | 0.299** | 0.425** | 0.388** | 0.513** |
| かかわり行動 | 0.487** | 0.546** | 0.464** | 0.501** | 0.433** | 0.236** |
| 集団参加 | 0.512** | 0.58** | 0.51** | 0.5** | 0.479** | 0.424** |
| 人への関心 | 0.301** | 0.315** | 0.288** | 0.35** | 0.267** | 0.279** |
| | | | | | **p<.01 | *p<.05 |

表３　コミュニケーション尺度の各因子を依存変数、６種類の社会的スキルを説明変数とする重回帰分析の結果

| | 状況に合った行動 | かかわり行動 | 集団参加 | 人への関心 |
|---|---|---|---|---|
| スキル1 | 0.145 | 0.189 | 0.184* | 0.013 |
| スキル2 | 0.18 | 0.236* | 0.255* | 0.043 |
| スキル3 | −0.115 | 0.146 | 0.166 | 0.053 |
| スキル4 | 0.149 | 0.158 | 0.078 | 0.182 |
| スキル5 | 0.01 | 0.151 | 0.096 | 0.008 |
| スキル6 | 0.359** | −0.158 | 0.092 | 0.113 |

**p<.01　　*p<.05

要な患者（他者）への関心を示すものであることから「人への関心」と命名した。信頼性であるクロンバックα係数は、因子１が0.837，因子2が0.819，因子３が0.817，因子4が0.67となり、因子４の信頼性が若干低いものの、全体として信頼性は確保されていることが示された。

次に本研究で作成した基本的コミュニケーション尺度の妥当性を検討するため、KiSS-18の６種類のスキルとの相関を求めた。表２に示す通り、本研究で抽出された4因子の内、第４因子の「人への関心」は、他の因子と比べ、KiSS-18の各スキルとの相関が低いものの、全体としては妥当性についても、十分耐えうるものであることが示された。ところで、相関係数だけでは、本研究で求められた各因子が、社会的スキルの全体の中でどのあたりに位置づけられるのかが明らかではない。そこでコミュニケーション尺度の各因子を依存変数、KiSS-18の各スキルを説明変数とする重回帰分析を実施した。その結果、表３に示すように、「状況に合った行動」はスキル６の「計画のスキル」と、「かかわり行動」は「高度なスキル」と、「集団参加」は「初歩的なスキル」および「高度なスキル」と偏相関係数が有意であった。一方、「人への関心」に対しては、いずれのスキルも有意な偏相関が認められなかった。

考　察

１）基本的コミュニケーション尺度の特徴

KiSS-18における質問項目が、いくつかの行動ステップを含む、比較的高次の抽象的レベルで語られているのに対し、本研究における基本的コミュニケーション尺度を構成する質問項目は具体的な行動レベルでの記述であった。本研究におけるような具体的行動レベルでの記述は、膨大な数にのぼり、尺度を構成する項目としては不適切かもしれない。しかしながら、具体的行動であれば、研究参加者は容易に反応でき、その解釈も極めてわかりやすい。KiSS-18の各スキルは、多くの状況への汎用性が高いが、その解釈は抽象的であり、わかりにくい。今後は、具体的ではあるが、同時に複数の状況や行動を象徴するような行動記述を精査し、尺度を構成する方法を探る必要があるのではなかろうか。本研究の一つ一つの行動記述は、具体的であるが、多くの状況や行動を象徴するものであるかを今後検討する必要があり、完成されたものとは言い難い。

２）基本的コミュニケーション尺度の各因子の特徴

因子１は、場面を的確に判断し、状況や相手を配慮した言語行動をとることに関わる因子とみなしたが、６種類の社会的スキルを説明変数する重回帰分析の結果は、因子１が「計画のスキル」と関連の強いことを示した。計画のスキルが「何をするかを決める」などの状況にあった決定能力を含むことから、両者に高い関連性が認められたのではないかと考えられる。因子２は、相手の話を傾聴する姿勢と相手に対する自分の意思を示すことができることと関連した因子であると考えられる。６種類の社会的スキルを説明変数とする重回帰分析の結果は、因子２が「高度のスキル」と関連の強いことを示した。この結果は予想に反するものであった。因子２は非言語的なレベルでのかかわり行動を示していると考えられるので、「初歩的なスキル」と強い関連を予想したが、結果は、因子２が比較的高度なスキルであることを示した。因子３は集団の中での自分の役割把握や主張ができることを示していると考えられる。

重回帰分析の結果「集団参加」は「初歩的なスキル」および「高度なスキル」と偏相関係数が有意であった。集団に参加するときは、挨拶などの初歩的スキルに加えて指示などの高度のスキルも求められることから当然の結果であると考えられる。一方、因子４は、看護師のコミュニケーションとして重要な患者（他者）への関心を示すものであるが、この因子に対しては、いずれのスキルも有意な偏相関を示さなかった。他者への関心といった側面は、社会的スキルとは異なるので、相関が認められなかったのかもしれない。

## 研　究　２

### 目　的

研究２の目的は、新しいコミュニケーション尺度で求められた看護学生のコミュニケーション能力が対人ストレスや職業同一化にどのような影響を与えるかについてのモデルを構築し、共分散構造分析によりモデル適合性を検証することである。

### 方　法

１ 調査対象

A大学に在籍する２年・３年・４年次生で承諾を得られた学生137名。研究１の調査の3か月後の2008年３月に実施した。

２　倫理的配慮

研究１と同じ方法で実施した

３　調査方法

基本的コミュニケーション尺度：研究１での最終版である26項目版を用いた。この質問項目に対し「いつもそうではない」「たいていそうではない」「どちらともいえない」「たいていそうだ」「いつもそうだ」の５段階評価の自記式質問紙（基本的コミュニケーション・スキルに関するアンケート）を用い、調査を実施した。共分散構造分析にはAmos11.0を用いた。

対人ストレス尺度：橋本（2000）が作成した30項目からなる対人ストレスイベント尺度。対人葛藤、対人劣等、対人磨耗の３因子からなる。各項目に対し、「全くなかった」から「しばしばあった」までの４段階で評定を求める。点数が高いほど、ストレスが高くなる。

看護職傾倒尺度：看護師としての進路にどの程度傾倒しているかを問う質問項目からなる。「１．自分は看護師にむいていると思う」「２．自分は看護師の道を選んでよかった思う」「３．大学で看護を学ぶことを選択してよかったと思う」「４．講義。演習は新しいことを学べて楽しい」「５．実習に行ってよかったと思う（実習に言ってみたいと思う）」「６．自分から進んで学ぶ姿勢を持っていると思う」「７．自分は人と関わることがやはり好きである」の７項目からなる。各項目に対し、「全くそうでない」「あまりそうではない」「ほぼそうである」「全くそうである」の４段階で評定を求める。得点が高いほど傾倒が高いことになる。

表４　コミュニケーションの各因子と対人ストレスイベントの各因子の間の相関

| | 対人葛藤 | 対人劣等 | 対人磨耗 |
|---|---|---|---|
| 状況 | −0.02 | 0.77** | −0.04 |
| かかわり | 0.12 | 0.87** | 0.07 |
| 関心 | 0.12 | 0.74** | −0.03 |
| 集団 | 0.12 | 0.24** | −0.03 |

**p<.01　*p<.05

### 結　果

表４には、基本的コミュニケーション尺度の各因子と対人ストレスイベントの各因子の間の相関を示している。基本的コミュニケーション尺度の各因子は対人ストレスイベントの中の対人劣等との間に強い相関を示したが、対人葛藤、対人磨耗との間には相関は全く認められなかった。一方、基本的コミュニケーション尺度の４因子と傾倒尺度の総得点の間に関しては、状況の因子とは0.371（$p<.01$）、かかわりの因子とは0.268（$p<.01$）、関心の因子とは0.171（$p<.05$）、集団の因子とは0.376（$p<.01$）と、いずれも有意な相関が認められた。以上の結果を参考に、コミュニケーション・スキル、対人ストレス（劣等）と傾倒に関するモデルを示したのが図１である。$\chi^2$検定の結果は、確率水準＝0.079でモデルからのずれは有意ではない。また、AGFIの値が若干低いものの、GFI、RMSEAの両指標ともに高いモデル適合性を示した。

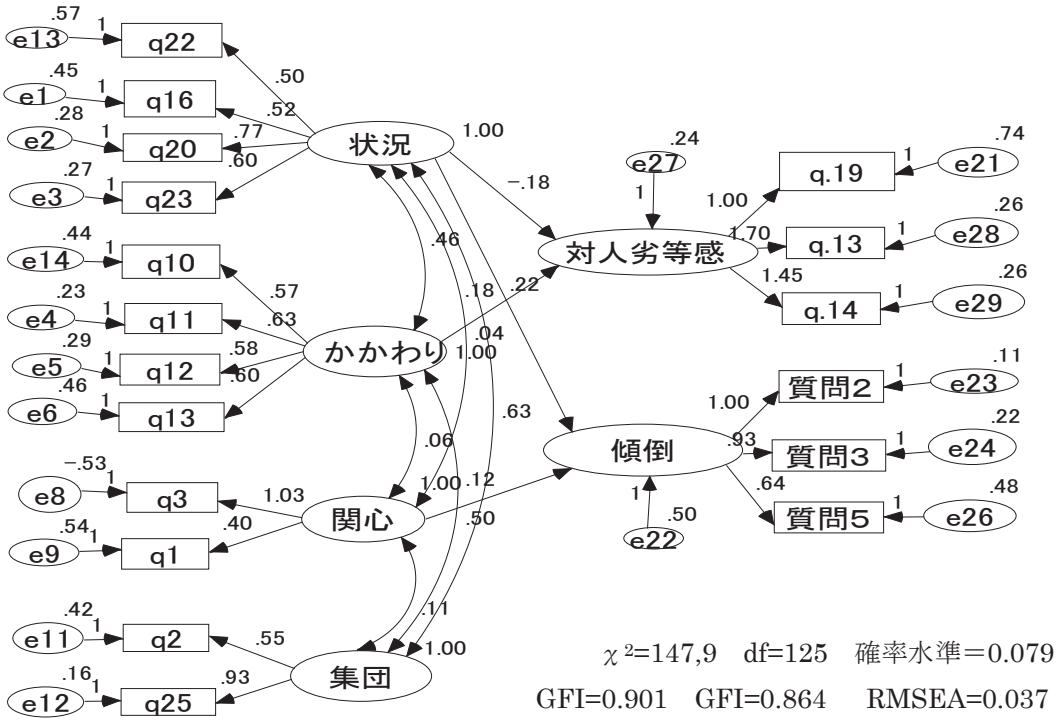


図１　コミュニケーション・スキル、対人ストレス（劣等）と傾倒に関するモデル

## 考　察

図１のモデルの中には基本的コミュニケーション尺度に関する確認的因子分析が含まれている。その結果は、因子１は言語行動に関わる項目のみを含むため、「状況に合った行動」というよりは、「状況に合った言語行動」と命名した方がよいかもしれない。同様に、因子２についても、非言語的なコミュニケーションのみを含むことから、この因子は「かかわり行動」というより「非言語的かかわり行動」と命名する方がよいかもしれない。これらの結果は、このモデルで示された12項目を看護学生の基本的コミュニケーション尺度の短縮版として活用する際には、因子名の変更もあり得ることを示唆している。

コミュニケーションと対人ストレスイベントの相関に関する結果は、橋本（2000）の結果と同様に、対人ストレスの中の対人劣等のみと相関があることが認められた。対人葛藤も対人摩耗も、自分のコミュニケーションの問題というよりは相手から受けるストレスに関する記述なので、関連性が認められなかったのは当然の結果かもしれない。看護職への傾倒に関しては、予想した通り、基本的コミュニケーション尺度のいずれの因子とも有意な相関が認められた。高いコミュニケーション能力は実習等での成功体験を増やし、結果的に看護職者としての同一性を高めると考えられる。

## 結　論

研究１の目的は、看護教員が看護学生のコミュニケーション能力として求める行動レベルでの質問項目を作成し、それらを因子分析することで、看護学生の基本的コミュニケーション行動を分類し、尺度を作成することであった。因子分析の結果は「状況に添った行動」「かかわり行動」「集団への参加」「人への関心」の４因子が認められた。この基本的コミュニケーション尺度とKiSS-18との関連を検討した結果、両尺度のすべての因子間で有意な相関が認められ、妥当性が証明された。更にコミュニケーション尺度の各因子を依存変数、KiSS-18の各スキルを説明変数とする重回帰分析を行った結果、基本的コミュニケーション尺度の各因子が社会的スキルの中でどのように位置づけられるかが明らかとなり、最初に予想したように初歩的スキルのみを測定しているわけではないことが示された。

研究２の目的は、看護学生のコミュニケーション能力が対人ストレスや職業同一化にどのような影響

を与えるかについてのモデルを示すことであった。最終的なモデルは各指標とも比較的高いモデル適合度を示した。また、予想したように、コミュニケーション能力は、対人ストレスの特に対人劣等に影響を持つこと、また、看護職への傾倒や意欲を高めることが示された。加えて、このモデルに含まれる確認的因子分析の結果は、因子名の変更をも含めて、基本的コミュニケーション尺度の短縮版の可能性を示唆した。

## 引　用　文　献（掲載順）


厚生労働省（2007）：看護基礎教育の充実に関する検討会 http://www.mhlw.go.jp/shingi/2007/04/s0420-13.html

橋本剛（2000）:大学生における対人ストレスイベントと社会的スキル・対人方略の関連、教育心理学研究、48（1）、94 - 102

宮田周平（2004）：社会的スキルと対人葛藤方略の関連、日本行動療法学会大会発表論文集、30、168 - 169

菊池章夫、堀毛一也編著（2002）：社会的スキルの心理学 - 100のリストとその理論 - 、川島書店

ゴールドスタイン、A・P／内山喜久雄（監訳）（1989）：スクールバイオレンス、日本文科学社

工藤千賀子、原田真理子、櫛引美代子（2007）：G大学看護学部における社会的スキルの実態、北日本看護学会誌、10（1）、45 - 51

野崎智恵子、布佐真理子、三浦まゆみ、千田睦美（2002）：１年間の経過からみた看護大学生の社会的スキルと自己効力感、生活体験との関連、11（2）、237 - 243

山本美弥、榊原千佐子、石井成郎、須賀京子（2009）：看護学生の社会的スキル向上を目ざすグループ学習の検討 - 授業デザインと教員の関わりに焦点をあてて - 、日本看護医療学会雑誌、11（2）、17 - 25

白鳥さつき（2009）：看護大学生が看護職を自己の職業と決定するまでのプロセスの構造、日本看護研究学会雑誌、32（1）、113 - 123